

# 今どきの嫁

1956  
作品ナンバー0006

この映画は、山形県婦人連盟が創立10周年記念として、農村の婦人の生活記録をもとに農村に根強く残る嫁姑の問題を山形の月山を背景に描いた作品で、製作費は山形県婦人連盟会員からの募金によって。題名の「今どきの嫁」は、戦後5年たって若妻学級や若妻会などが生まれ、嫁も社会的に解放されていく風潮の中で、若い嫁に対する古い姑たちの皮肉をこめた言葉で、その頃の流行語だった。そうした時代の姑・嫁・その夫の三角関係の悩みを、嫁の側からとらえた作品だが、家では姑の立場にある婦人会の幹部たちが、こうした作品を企画したところにこの映画の積極的な意味があり、山形県婦人連盟は、この企画によって『河北新報』の〈河北賞〉を受けた。



夜明けに嫁のみさ子は実家へ逃げ帰った。はじめはいい嫁になろうと努め、姑のとめも優しくしたが、古い農家の生活を少しでも明るく合理的なものにしようとしたみさ子のささいな行動が、とめの氣に入らず、次第に気まづい仲になっていった。みさ子への非難は近所の姑たちの噂にものぼり、とめはいっそうみさ子に意地悪くあたるようになっていった。長男である夫の源一は、農家の因習に縛られ、みさ子の訴えに耳を傾けることができなかった。

青年団時代からの理想をもっていたはずの源一は、ただの亭主関白に変わっていた。実家に戻ったみさ子は忍耐のぎりぎりまできてしまったと思い、仲人の言葉にも黙っていた。再び婚家の敷居をまたぐ自信がなかった。

そのみさ子が、娘時代の友達に「自分の姑もなかなかのむずかし屋で大変だ」と温かくねぎらわれ、農家の嫁の苦労は自分1人ではないと悟る。やがて迎えにきた夫も、これからはみさ子だけに苦労をかけないといった。2人はもう一度やり直そうと誓いあった。一方、姑のとめも口やかましい自分を反省していた。

劇  
35ミリ  
白黒／49分

■企画  
山形県婦人連盟

スタッフ

■製作  
村山英治  
■脚本・演出  
青山通春  
■撮影  
牛山邦一  
■照明  
田畑正一  
■録音  
大塚忠男  
■美術  
阿部三郎  
■音楽  
渋谷 修  
■編集  
沼崎梅子  
■製作主任  
鈴木寿二郎

■出演  
姑・とめ：飯田蝶子  
嫁・みさ子：  
岸 旗江  
みさ子の夫・源一：  
鈴木瑞穂  
他